

## 消費者教育 実践事例集

# 高校生による 小学生向けネットトラブル防止教材の開発と実践 — 高校・大学・県民生活センターが連携した消費者教育の試み —

齋藤 智子 Saito Tomoko 静岡県立相良高等学校教諭

高校生が地域貢献活動を通して、学び、成長していくために必要なことは何かを探究している。

### ネットの危険を 自分事としてとらえる

本校は主にボランティア活動を通して、地域貢献活動に学校全体で取り組んでいます。筆者が顧問を務める福祉家庭部は、高齢者施設での交流や放課後児童クラブでの触れ合い活動など、主に子ども・高齢者への「地域支援活動」をしています。こうした活動から今回、小学生向けのネットトラブル防止教材の開発に参加し、放課後児童クラブの協力で小学生にワークショップを開き、実践しました。

内閣府の「令和元年度青少年のインターネット利用環境実態調査」によると、小学生の86.3%がネットを利用するなど、子どもたちがネットに触れる機会は増加しています。本実践で関わった小学生の調査でも、平日はネット・ゲームのいずれも30分～1時間程度利用している小学生が多いことが分かりました。こうした現状がある一方で、ネット利用が増えるほど、さまざまなネットトラブルに子どもが巻き込まれるリスクも増加するおそれがあります。

従来の小学生向けネットトラブル防止教材は、トラブルが起こるまでの過程が詳しく記述され、怖がらせたり、「気をつけなさい」と指導したりすることで、子どもに注意喚起させる手法が一般的でした。しかし、こうした教材は、その場では子どもたちは理解を示しますが、危険を自分事としてとらえ考えていく経験ができないことが課題と考えられます。そこで、教材開発に当たり、①いかに子どもたちが危険を自分事としてとらえ考えていくか②単に注意を促す

だけでない体験型の教材をいかに構築するか、が主要な課題となりました。今回は、福祉家庭部に所属する高校生が、静岡大学教育学部塩田研究室、静岡県中部県民生活センター(以下、センター)と連携し、それぞれの強みを生かした助言を受けて、教材開発を行いました。これは、センターによるコーディネートおよびサポートにより実現可能になった取り組みでもあります。

### 高校生が「小学生に教える」意義

本実践では、高校生がネットトラブル防止を「小学生に教える」という消費者教育を試みました。年齢も近いため、小学生も親しみやすく、さらに、ほとんどの高校生がネットを使用しているため、自身のネットトラブル経験も含めて話すことができます。また、小学生に伝わるように、まず自分がよく理解すること、言葉選び、説明の手順、小学生の意見をどうつなげていくかなどを考えることは、想像力や段取り力を高められる、とても貴重な機会となりました。

### 教材を使用したワークショップ

2019年8月、夏休みを利用して、牧之原市立川崎小学校区内の放課後児童クラブ4カ所に在籍する1～5年生の小学生82名を対象としてワークショップを行いました。

最初にじゃんけん遊びを楽しみながらアイスブレイクの時間を設けました。次に、学年別の3～4人の小学生と高校生1人がグループとなり、「スマートフォンを使ったことがあるか?」「どのアプリ(サイト)を使ったことがあるか?」

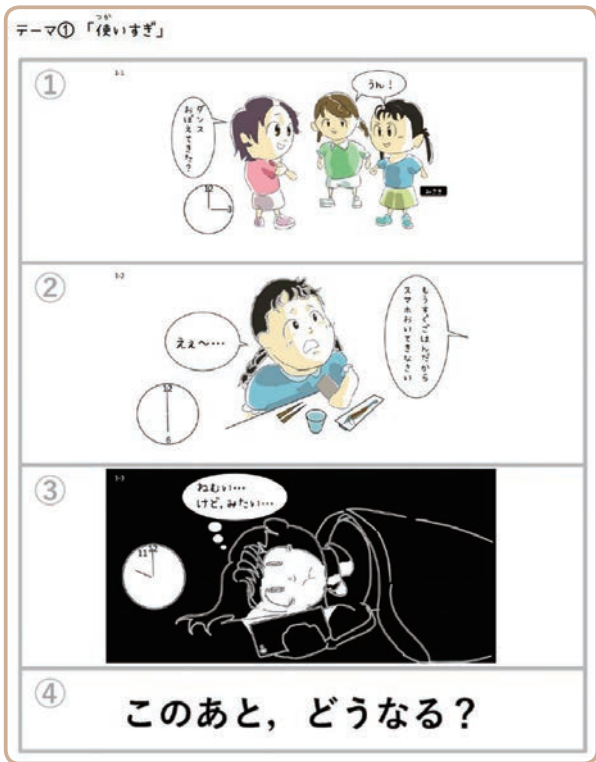
表 教材で扱ったネットトラブル

<p>【ゲーム系】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①使いすぎ</li> <li>②暴力ゲーム</li> </ul> <p>【セキュリティ系】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>③写真による身バレ、顔バレ</li> <li>④動画による身バレ、顔バレ</li> <li>⑤なりすまし</li> <li>⑥広告、ポップアップ</li> </ul>	<p>【コミュニケーション系】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>⑦いじり、悪口</li> <li>⑧チェーンメール</li> <li>⑨動画サイトのコメント欄での炎上</li> <li>⑩知らない人からのフォロー、出会い</li> </ul>
---	--

写真 ワークショップのようす



図 ネットトラブル防止教材の一部



という簡単な質問をして、利用状況を把握しました。それをもとに高校生は、今回開発した教材の情報モラル漫画を10種類の中から1つ選択しました(表、図)。漫画は4コマで構成されていますが、イラストは3コマまでで、4コマ目は「このあと、どうなる?」と書いてあります。小学生は高校生との対話を通して「この後どうなるか」をよく考えて、発言しました。これに対して、同意する発言、自分の考えを補足する発言など、小学生同士の積極的な対話によっても、ワークショップは円滑に進みました(写真)。また、漫画の中で、危険だと思うところにマグネットを貼り、危険に対して、どこで気がつきそうかを見える化しました。これは小学生に

とって、自分や友だちの考えが分かり、高校生も小学生の思考を読み取ることに有効に活用できました。

実践後の小学生のアンケート結果には、7割近くで高校生との会話、理解度に肯定的な意見がみられ、高校生のアンケート結果からも、本教材で多くの小学生がネットトラブルを理解し、その想像力が深まったことがうかがえました。

高校生は、小学生から意見を引き出すことや分かるように説明することの難しさを実感する場面もありました。しかし、うまく伝わるように言葉や話題を選ぶなどの試行錯誤を繰り返し、最後までやり切ったことでアンケート結果にも、子どもへの説明、子どもとの会話、説明への自信については肯定的な結果が出ました。

### 今後の課題

今回開発した教材は、子どもたちがネットのあらゆるケースのリスクを予測し、自分事として考えることができ、実際にネットを利用する際にもリスク管理の意識を持つことができるのではないかと考えます。さらに、高校生が本教材を活用し、小学生と一緒に考えるワークショップを開催できたことは、成年年齢の引き下げに向けて若年層の消費者問題に対する関心および当事者意識を高めることにつながりました。

今後は、教材の普及に向けて、大学・センターと連携を図りながら、消費者教育をさらに充実させていくとともに、変化の激しい世の中において、「子どもたちがたくましくよりよい生き方を考えられる」学びとは何かを模索していきたいです。